看護業務の効率化先進事例アワード　2023

新興感染症に対応可能な看護体制の構築
―SUB ICN を導入して―

福井県立病院

特別賞

福井県立病院

病院理念

私たちは、総合的かつ高度な医療の提供を通じて、県民に信頼され、心あたたまる病院をめざします。

所在地　福井県福井市四ツ井2-8-1

病床数　759床　※2023年12月1日現在

主に算定している入院基本料
- 急性期一般入院料１
- 精神病棟15対１入院基本料
- 結核病棟７対１入院基本料
- ハイケアユニット入院医療管理料１
- 救命救急入院料１

職員数　1111名　※2023年12月1日現在

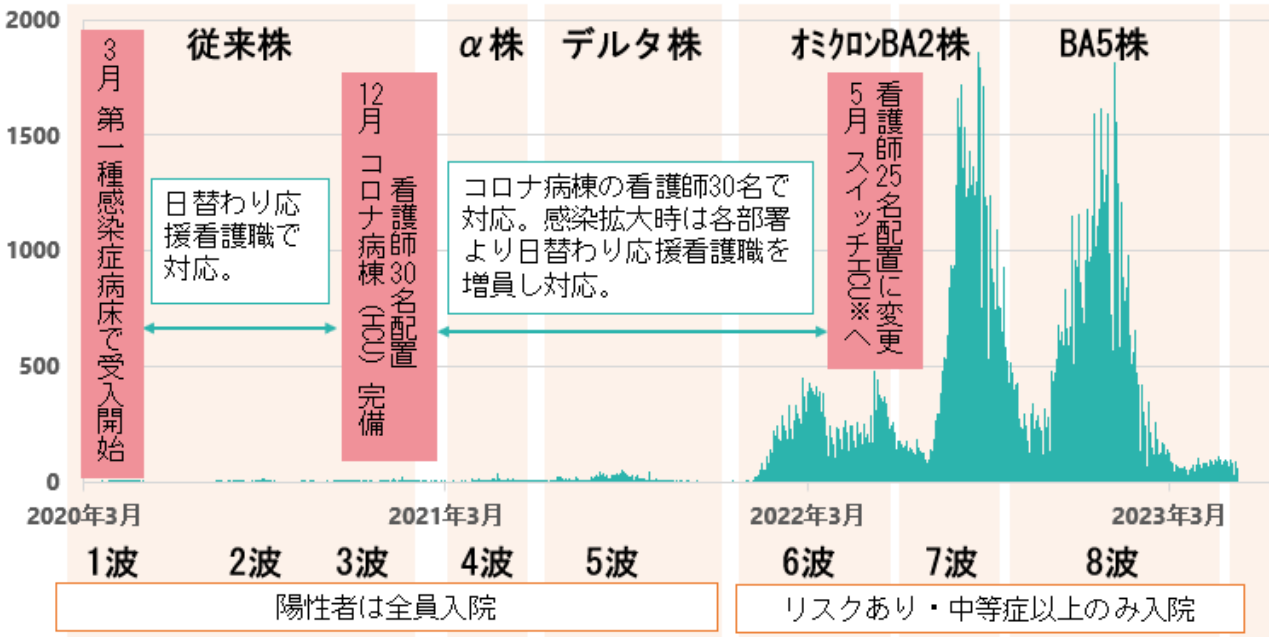
うち看護職員数　752名

HP　https://fph.pref.fukui.lg.jp

1 新型コロナウイルス感染拡大によるマンパワー不足

2020年3月、新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）患者の受け入れを開始。
同年12月、新型コロナウイルス感染症患者専用病棟（以下コロナ病棟) を完備。
コロナ病棟内に重症者用コロナHCUを設置、看護師30名を配置したが、感染拡大によって看護職のマンパワー不足が生じ、各部署から日替わり応援看護職を増員することで対応していた。

福井県のコロナ流行状況と当院の患者受け入れの推移



〈病院の方針〉
一般の患者、コロナの重症・妊婦・小児・透析・精神・高齢者等の患者すべての入院を断らない

※ 平時は通常患者用HCU、感染拡大時は重症コロナ患者用HCUにスイッチして使用する

2 応援看護職が日々入れ替わることによる業務の煩雑化

コロナ病棟看護師

- 患者一人一人の状態を説明し、申し送りに1時間以上かかることがある
- 防護服の着脱など基本的手技を指導することに時間を要し、業務の遂行に支障が生じている
- カンファレンスの場で応援看護職が意見を出すことに躊躇している様子があり、全員参加の話し合いになっていない実態がある

応援看護職

- 慣れない環境で、ストレスフルになっている

医師

- 指示の内容を速やかに理解されなかった場合など、業務に対する不安を看護部に訴えていた

感染管理認定看護師（以下ICN）

- 応援看護職が入れ替わるたびに感染予防に向けた指導に時間を要し、感染管理業務に支障をきたす
- 夜間や休日にも電話による問い合わせが多い

課題

課題

応援看護職が日々入れ替わることにより業務が煩雑化し、安全・安心な看護が提供できていないのではないか

▼

各部署（22部署）から日替わりであった応援看護職を固定化する

固定化した応援看護職の役割
平時：各部署において感染管理の中心的な役割を担う
感染拡大時：コロナ病棟に即時招集し、看護の初動体制をとる

固定化した応援看護職と、コロナ病棟に配置している看護職を新興感染症に対応可能な看護職として、SUB（サブ） ICN（Infection Control Nurse ：感染制御看護師）と名付けた。

課題解決へ向けた取り組みの目的・目標

目的

SUB ICNの導入により、新興感染症に対応可能な看護体制を構築し、第一種・第二種感染症指定医療機関としての役割を果たす

目標

① 日替わりであった応援看護職を固定化する

② SUB ICNの役割機能を明確化する

③ SUB ICNの知識・技術を向上する

方法

① 各部署（22部署）よりSUB ICNを1名ずつ選出（計22名）

看護部長より看護師長にSUB ICN導入を説明→看護師長より部署の看護職にSUB ICNの役割を説明→看護師長がリーダー看護職より希望者を募り、人選

② SUB ICNに辞令交付とバッジを付与

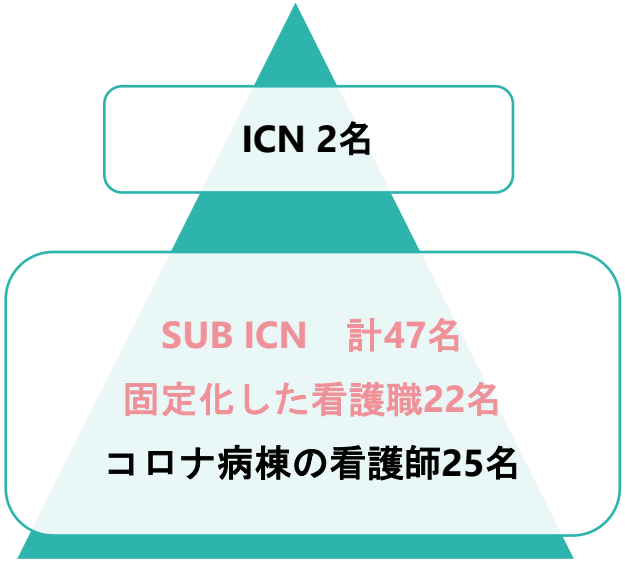
③ 年間教育カリキュラムを組み、SUB ICNに研修を実施

1 日替わりであった応援看護職を固定化する

2022年４月

- ICNに看護部の方針を説明
- 看護部連絡会議で、看護部長より看護師長にコロナ病棟の体制、SUB ICN配置の目的を説明し、各部署でSUB ICN１名の人選を依頼
- 看護師長は部署の看護職にSUB ICNの役割について周知し、人選

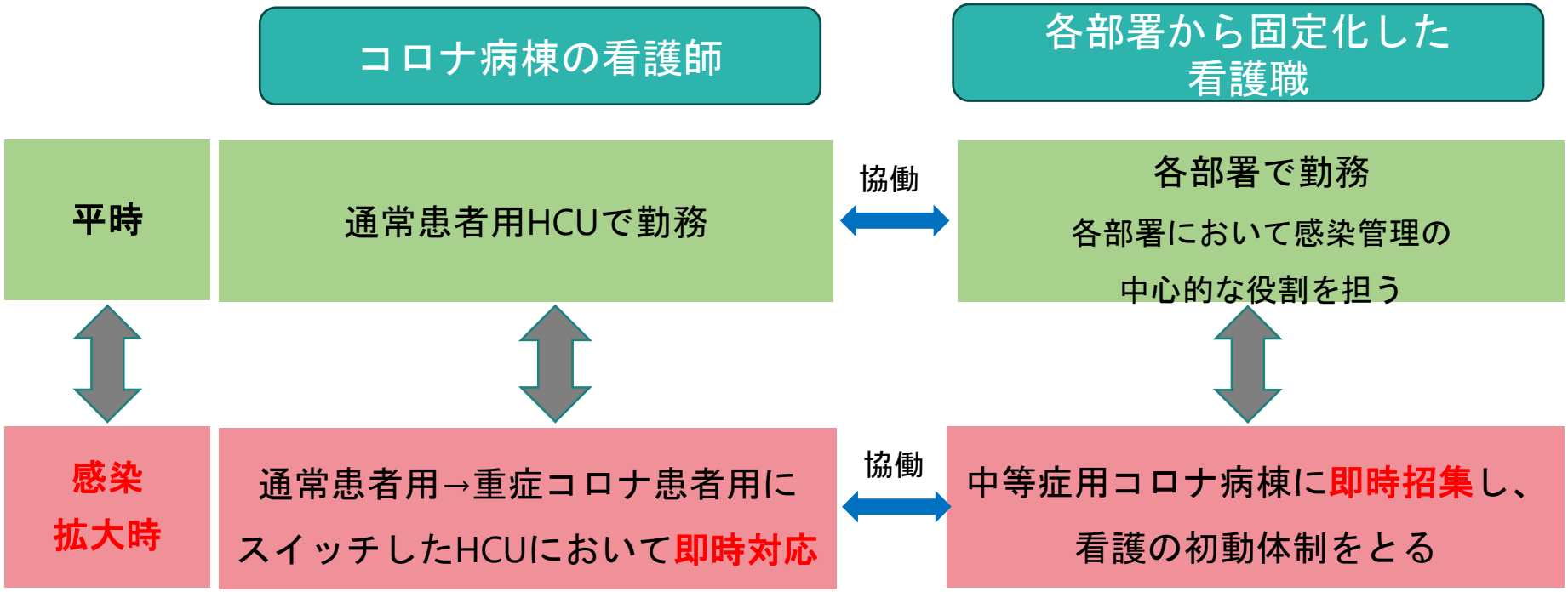
SUB　ICNの構成



1 日替わりであった応援看護職を固定化する

新興感染症に対応可能な看護体制（SUB ICNの機能）

新興感染症専用病棟を常設化し、必要となる病床数を確保するとともに、平時から各部署に看護職を加配し、新興感染症発生時にこれらの看護職を招集することにより、即時、感染症病床の看護に当たることのできる看護体制を構築する

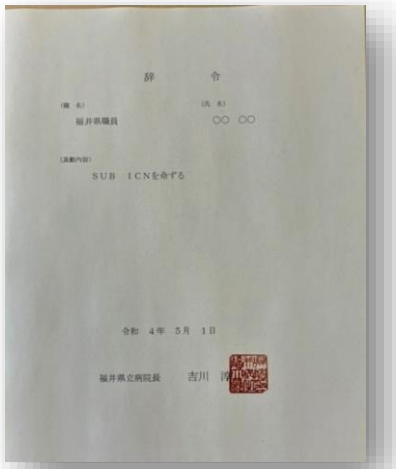


2　SUB ICNの役割意識を明確化する

2022年５月　辞令交付式・バッジ付与

- 院長より一人一人に辞令交付
- 院長やICD（感染制御医師）より、当院の使命を伝える
- 看護部長よりバッジを付与
- 院長・事務局長・事務局次長・事務総括主任、ICD（感染制御医師）、ICN、看護部長、看護部次長が列席

辞令



バッジ

3 SUB ICNの知識・技術を向上する

- 2022年５月　ICNを中心に看護部、コロナ病棟の看護師長、副看護師長とともにSUB ICN研修の年間カリキュラムを決定。お知らせを配布。
- 2022年６月～2023年３月　SUB ICN研修（計20時間30分）を実施。

SUB ICN研修 年間カリキュラム

研修月	研修時間	研修内容
2022年6月	1時間30分	ICDによる勉強会
7月	1時間30分	コロナ病棟オリエンテーション及びシミュレーション
8月	1時間30分	搬送シミュレーション（発熱外来・救急外来・CT室・手術室・透析室）
9月	1時間30分	各病棟でコロナ患者が発生した場合の対応シミュレーション
10月	1時間30分	感染症法の分類と院内における対応について（第一種、第二種感染症病床、ゾーニング部署見学）
11月	1時間30分	県地域医療課 感染管理認定看護師による行政・保健分野との連携について講義
7.10.11月のいずれかの月	7時間45分	人工呼吸器装着患者対応研修（1日研修）
12月	1時間30分	院内での活動と感染予防対策について
2023年1月	1時間30分	メンタルセルフケアについて（講師：精神看護専門看護師、内容：講義後、グループワークでコロナ病棟で勤務する思いを共有）
2月		各部署で防護具着脱・感染予防の注意点について指導する 修了テスト（Web上で各自受験。70点以上で合格）
3月	45分	活動報告会 看護部長より、修了証授与

SUB ICN研修の様子

成果

1 業務量の削減

- 初回勤務時、防護具の着脱指導：１人当たり15～20分
  ▶ SUB ICN研修で実施するので指導は不要
  15分× SUB ICN 22名＝330分の削減

2 1つの業務に要する時間の短縮

- 申し送り時間約50分 ▶ 申し送り時間約30分に減少し、患者対応に余裕が持てるようになった
- ICNへの休日・夜間を含む相談が頻発 ▶ 相談件数５件/月以内に減少

3 看護職の身体的負担の軽減

- 休憩時間が１時間取得できない ▶ 確実に1時間取得できるようになった
- 受け持ち患者の対応だけ行っていた ▶ 看護職同士の会話が増え、協働して業務を行うようになった

4 看護職の精神的負担の軽減

- 患者の個別性に応じた継続性のあるケアの提供がしにくい
  - ▶ 患者のケアについて話し合う機会が増え、個別性に合わせたケアの提供ができるようになった　例：終末期患者のガラス越し面会実施
- コロナ病棟看護職の職務満足度調査の結果（点数は平均、3点満点）

項目	導入前（2021年10月）n＝30人	導入後（2022年10月）n＝25人
患者に信頼されている思う	1.55点	1.77点
日常業務の中では自分で判断し看護を行うことが多い	1.87点	2.27点
職場での仕事の悩みや問題を気軽に話すことができる	1.39点	1.54点

日替わり応援看護職のメンタル不調により突然の勤務変更あり

- ▶ SUB ICN研修でメンタルセルフケアや定期的な簡易ストレス度チェックを行い、メンタル不調による勤務変更なし

5 知識・技術の向上

- SUB ICN研修を受講し、修了テスト全員合格
- 医師からの声
  「研修を受けた看護職を配置してくれとても助かる、
  みんな頑張ってくれている」

効果

1 コロナ病棟への適切な人材配置

- 各部署より日替わりで応援看護職をコロナ病棟へ派遣していた
  ▶コロナ病棟に派遣する応援看護職を固定化した

  2022年度　コロナ病棟配置の25名と研修を受けたSUB ICN22名（計47名）がコロナ病棟で勤務可能となった。
  2023年度に向けてのSUB ICN継続調査（2023年1～2月）では、SUB ICN 22名中、18名（82%）が継続する、３名（14%）は一旦外れて有事には勤務する、１名（４%）は子供が生まれたので外してほしいという意思を示した

2 看護職間でのチーム連携の向上

- 看護職がペアとなり受け持ち患者のケアだけを行っていた
  ▶ペアでケアを行うことに変更はないが、応援看護職を固定することにより看護職同士の会話が増え、ペア間だけでなく他ペアとの協力体制が強化された。
  ・様々な話し合いによりアイデアが生まれるようになった。
  ・インシデントの情報をさらに積極的に共有できるようになった。
  ・入院患者数や患者の重症度によって看護職の招集がスムーズになった。

3 他職種の満足度の向上

医師からの苦情の減少・お褒めの増加

- コロナの治療だけでなく、基礎疾患の治療にも対応できる各科の優秀なリーダー看護職を配置してくれ、スムーズな診療ができるようになったと評価された
- コロナ病棟に勤務する看護職の感染対策の知識や実践能力が向上したことで、コロナ病棟勤務に不慣れな医師からは、看護職が防護具の着脱やゾーニング等を教えてくれるので助かるといった声が聞かれる

4 感染管理認定看護師を目指す看護師が増加

- 2005年より１名、2015年より２名の感染管理認定看護師が在籍しているが、2015年以降、希望する看護師０名
  - ▶ 2022年・2023年・2024年に１名ずつ計３名、認定看護師教育機関入学希望あり（うち２名はSUB ICN。コロナ病棟で勤務する中で感染管理の重要性を痛感し、さらに専門的知識・スキルを身につけたいと入学を希望した）

2023年12月時点　感染管理認定看護師　3名
（入学中1名、次年度入学予定1名）

取り組み導入のポイント

1 組織の使命を明確に伝え、SUB ICNを選出する

- 看護部長より看護師長に、組織の使命・方針、SUB ICNの役割を伝えた
- 看護師長より看護職員に周知し、各部署でSUB ICNを選出した

2 辞令交付とバッジの付与により、SUB ICNの役割意識を明確化する

- 辞令交付式には、院長・事務局長・事務局次長・事務総括主任、ICD、ICN、看護部長、看護部次長が列席
- バッジを付けることにより、SUB ICN本人が役割意識を明確にもつとともに、病院職員への見える化につながった

取り組み導入のポイント

3 病院全体で取り組む

- 病院の重点項目に新興感染症に対応可能な看護体制の構築が挙げられた
- SUB ICN研修は、ICNが中心となりカリキュラムを組み、講師は各分野の専門・認定看護師、コメディカルがそれぞれの立場で講師を務めた
- 病院の広報誌でSUB ICNが紹介された
- 令和4年度 院内優良職場賞でSUB ICNは功績賞を受賞した

4 SUB ICNと各部署の全看護職に感謝の意を伝え続ける

- 看護部長・看護部次長がSUB ICN研修やラウンド時に、SUB ICNに感謝やねぎらいの言葉を伝えた
- 師長会や師長ミーティング等で、各部署の看護職にむけて、SUB ICNが不在時の勤務を引き受けてくれていることに感謝の意を伝えた
- 看護師長がコロナ病棟に出向き、自部署のSUB ICNに声掛けを行った

今後の展望

1 年度毎にSUB ICNの看護体制を再編成し、継続する

- 年度毎にSUB ICNの継続意思を確認し、看護体制を再編成する
- 新メンバーに、院長から院内辞令を交付し、バッジを付与する
- SUB ICN研修を継続していく

2 SUB ICNが継続的に感染制御の知識・技術を維持・向上するための研修体制の充実

- SUB ICNを継続する看護職には、SUB ICNフォローアップ研修を実施

3 新興・再興感染症に対応可能な新たな看護職の育成

- SUB ICN以外にもSUB ICN研修受講希望者を募り、研修を実施